

城下町と観音さん



バス…三重交通バス「三重会館」徒歩10分

車…伊勢自動車道津ICから車で10分

慶長16(1611)年に着手した津城の改修と平行して、高虎は津の町を本格的な城下町とする都市整備を開始した。その内容は、城を中心として北西南の3方向に武家屋敷を配置し、それまで海岸沿いを通っていた参宮街道を城下に引き入れて城の東側に宿場町を形成し、さらに東側に堀川を設けて外側には寺院を集め寺町とした。寛永年間(1624~1644)の城下図を見ると、高虎と共に伊予から移住した人々が住む伊予町との間の岩田橋が立派に描かれていることとは対照的に、安濃川には橋が架けられておらず、城下の北側の防御の意識があったと考えられる。

参宮街道は、城下では外堀に沿うように屈曲しており、立町、大門から宿屋町、地頭領、分部町を抜けて岩田橋に至る。城下の北東隅にあたる場所には「津の観音さん」として市民に親しまれている観音寺がある。ここは城の鬼門の方角にあたり、高虎は関ヶ原合戦に伴う安濃津の戦いで焼失した観音寺を再建して藤堂家の祈願所とした。昭和20年の空襲で焼失したため当時の建物は残っていないが、なかでも仁王門は3代將軍家光の病氣平癒祈願のために高虎が建立させたと伝えられる。その構造は楼門様式で、この門の堂々とした姿が「大門」の地名にも反映されている。現在、戦後再建された観音堂の正面に高虎が寄進した銅燈籠が往時と変わらずあり、高虎の観音寺への信仰のあつさの一端を今に伝えている。

(「広報津」平成20年7月1日号)



津観音にたたずむ銅燈籠